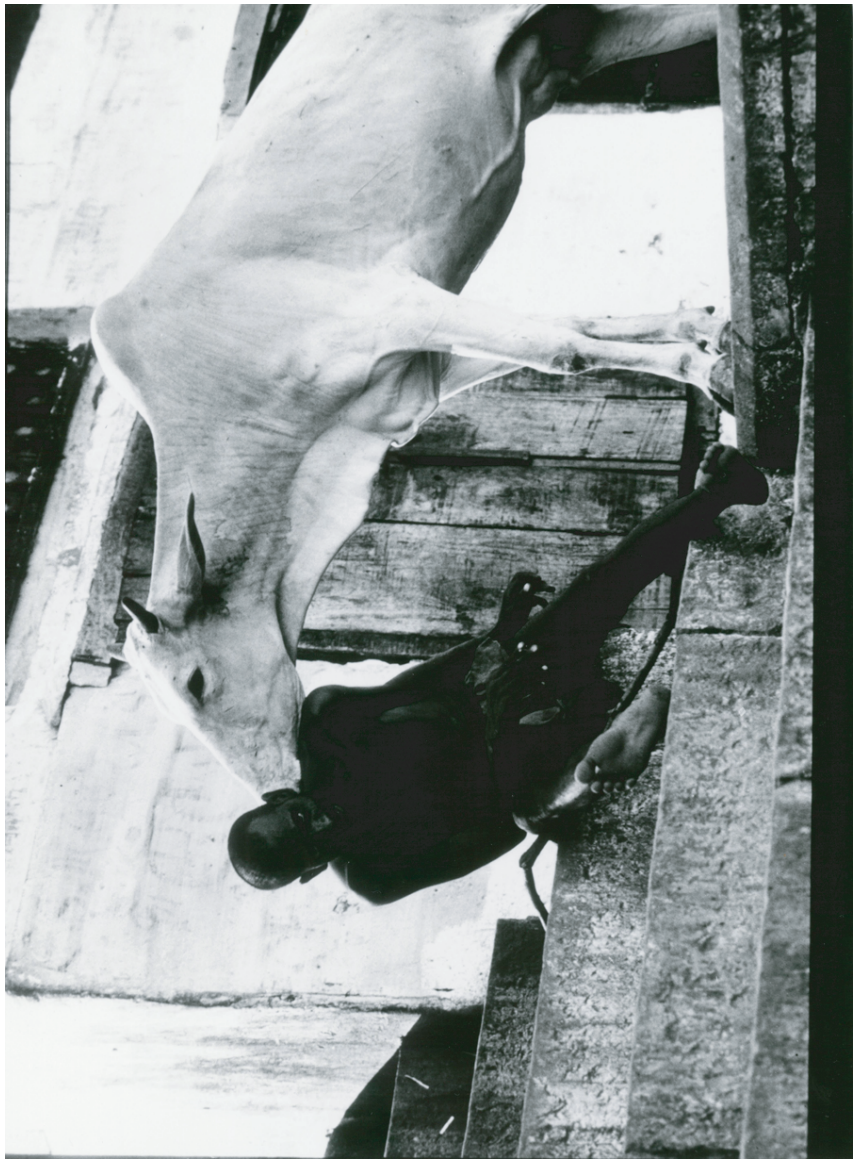
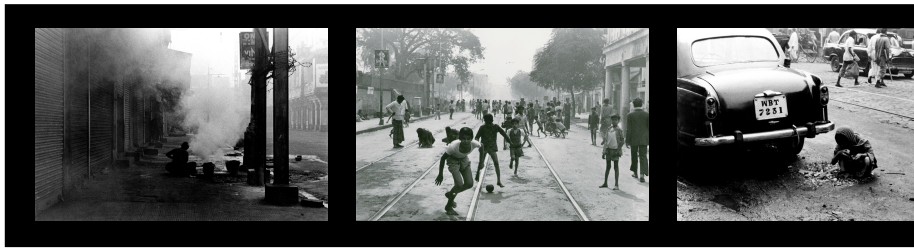




Katsumi Watanabe

1982　印 度 <INDIA>

渡辺克巳 写真展Ⅱ

「1982 印 度」直土ヒタツチ胎内

2011.09.23 fri – 10.30 sun

直皮膚(はだ)に吸い込まれる　大気
滔々と沁み染まる　命の泥土
足裏から脳天へ迸る　聖なる濁水

「タイムトンネルくぐって本当に中世に出たみたいな。カルカッタから離れるにしたがって段々中世的なものがそのまま出てくるんですよ」(渡辺)
中世の世界がそのまま眼前に混在するインドの日常を、流しの写真屋渡辺克巳が新宿と同じ目線で捉えた、ストレートで極めてオーソドックスなモノクロ写真に写りこんだものは‥

「空気は空気としてちゃんとあるのか　太陽は太陽としてちゃんとあるのか
木は木としてちゃんとあるのか」(渡辺)

1941年生－「新宿の流しの写真屋」と呼ばれ こよなく新宿を愛す
死ぬまで路上の段ボールに据わり 新宿を撮り続ける－2006年逝去

今回初公開となるオリジナルプリント80点(予定)は、渡辺克巳が大きなインドに呑みこまれたような、圧倒的な実在感をもってこちら側へ迫ってきます。

トークイベント

金子隆一　東京都写真美術館専門調査員
増田　玲　東京国立近代美術館主任研究員
日時：10月15日(土)　　18：30 ～
於：本妙院　台東区谷中４－２－１１
(sekkaより徒歩２分/日本美術院並び)
参加費：1,500円
人数：30名(事前予約制)
tel：03-5815-8280
email：info@sekka-jp.com　www.sekka-jp.com

Tokyo Sekka presents

ベナレスで見ていると上の方で洗濯しているのね、その水が流れてくるじゃない、それに浄水槽から泥水みたいのがドロドロと出て来る、その下の方で御神水として飲んでいるわけ。分かんないねあれは。病気の人も一緒に入るんだよね。上から死体が流れてきたりね、死んだ人も河っ淵で荼毘にふすわけですね、だからあそこにいて見あきないね。全部あるわけですよ。

輪廻なんていっているのがさ、目の前で全部見えちゃうわけですよ。

インドへ行くと神様が、それはいわゆる偶像とかなんかじゃなくて、まず空気は空気としてちゃんとあるのか、太陽は太陽としてちゃんとあるのか、木は木としてちゃんとあるのか、それがちゃんと見える。それはやはり神々という感じがするのね。日差しがもの凄く強いと、でっかい木があって日陰をちゃんと作ってくれる。

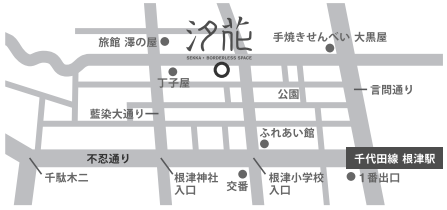
すると、その日陰そのものが神様みたいに見えてくる。

暑い時に日陰に入ると涼しい風がスッときて、そこで賤民みたいな人たちが涼んでいるとね、人知じゃなくて、大きな何かに助けられて生きているみたいなところがあって、そういうのが神様じゃないかと思う実感があるのね。

日本で泣くような事があってもインドを見てしまえば、なんだ泣く事ないじゃないかという気がするわけですよ。それはなんていうんだろうね。幅が広いんですね。新宿しか知らなければ、大変な所だなと思って見ていたんですが、

インドへ行ったら百倍の人間の幅がある。
それが自然の一つとして調和して生きているんですね。

「新宿、インド、新宿」ポット出版より(初出 1985「流行写真」三和出版)



東京メトロ千代田線 根津駅(1番出口)より徒歩４分

汐花
SEKKA・BORDERLESS SPACE
113-0031 東京都文京区根津 2-24-3 / 2-24-3 Nezu Bunkyo-ku Tokyo 113-0031 Japan
Tel: 03-5815-8280　Fax: 03-5815-8270　Email: sekka12@nifty.com　www.sekka-jp.com
Open: 11:30~18:30　Close: 月曜日 / Mondays（祭日Open 翌火曜休み）